

## 茶の湯のうつわ、いまむかし

千宗屋

器ブームといわれて久しい昨今、工芸や茶の湯を取り巻く状況はそれなりに活況を呈している。魅力的かつ個性的な器を作る陶芸、工芸作家の若手が次々に現れ個展やギャラリーも陸続としている。また茶の湯や古典の器の展覧会はあちこちで開かれ、こゝに来春は東京国立博物館で「特別展 茶の湯」、年末より京都、来春東京の国立近代美術館では「茶碗の中の宇宙——樂家一子相伝の芸術」が開催される等、ここ数年の一連の流れのピークを今まさに迎えようとしている感がある。

私自身は茶の湯を生業とする家に生れ、幼い頃から茶の器には自然と親しんでいた。が、それらを自覚して意識してみるようになった最初は平成二年、一九九〇年春のこと。わが茶の大成者千利休（一五二二―一九〇〇）年に因んで京都国立博物館で開催された「四百年忌 千利休展」においてであった。それまでは家業のいわば仕事道具であった茶の湯道具が、アカデミックな国立博物館の陳列ケースの向こうに恭しく据えられ、改めて「美術・工芸品」として客観的に見たことが、その後私を茶の湯やそれに関わる美術工芸品への関心へと駆り立てていく大きな契機となった。さらにその時にみた茶道具が、わが茶の造形の原点ともいえる千利休ゆかりの、「利休道具」であったことも大きく幸いした。

数ある茶道具の中で、利休ゆかりの茶道具に共通していえることは素材を活かしたフォルムの美しさと、寸法への徹底した厳しさから醸される緊張感である。これ以上足すことも引くことも出来ない完成された造形美は、「利休形」としてその後長く茶の湯のかたちの規範として、絶対的な地位を確立している、まさしく「古典」であるといえよう。土の温もりや柔らかさを残しながら、手捏ねにより左右対称な形を意識して丁寧に削り上げられた長次郎の赤と黒の樂茶碗。漆の塗目を残しつつ全体の形の美しさと機能のみ

を形に抽出した盛阿弥の棗、どこでも採取可能な素材である竹を取り上げ、使い勝手に基づいた形をとことん吟味した中節の茶杓や、花を活かすつつ間合いを見極めた竹花入など、いずれも利休によって茶の湯の造形は完成され極まったといつて過言ではない。

それら利休道具の中でも、私が二十六年前のその時最も心惹かれたのが、表千家不審菴に伝わる利休所持「台子皆具」〔図1〕である。土や漆がベースにあるイメージの茶道具には一見似つかわしくないように映る金工の器。塗師盛阿弥が丹念に塗った真塗黒漆の四本柱の台子の棚に、天下一の称号を得た釜師与次郎による切り合わせの鉄の釜と唐銅の鬼面風炉。さらに同じく与次郎の手に掛かると思われる、たつぷりした量感で艶やかで金味麗しい唐銅の水指、杓立、蓋置、建水の皆具が威風堂々と並ぶ。それまでどちらかというと仏像や仏教美術によりシンパシーを感じていた自分にとって、むしろこの厳しさすら憶える凛としかつ大らかな造形美に強く魅せられた。何より全体の醸し出す荘重な雰囲気と、それぞれの器の間合いが生み出す完璧ともいえるバランスに、大いに共鳴した。以後私自身が茶道具や器、それらの取り合わせを見る時、この鑑賞体験が原点になっていることは間違いないといつていい。

その後、折に触れて茶会や展覧会には積極的に出かけ、多くの器や作品を見る機会をもった。茶の湯の道具にはそれこそ多種多様な素材や時代、さらに国のものが存在する。今多くの茶会に招かれて拝見する茶道具は制作された当初から茶道具として生み出されたものがほとんどだが、かつて利休の頃、或いはそれより以前は「見立て」、つまり我が国の茶の湯のために制作されていないものが初期の茶人たちの眼によって拾い上げられ、茶道具に取り立てられたものがほとんどである。それは中国における喫茶の用具である天目や茶人に始まり、朝鮮半島の祭器や雑器であった高麗茶碗、東南アジアの水壺や祭器、さらに一七世紀にはその範囲はヨーロッパ、オランダにも及ぶ。それらはいずれも茶人たちの厳しい美を見極める眼が選り出したものたちだが、同時にそれは



図1 「利休唐銅皆具」17世紀後半 不審菴藏

とても自由で大らか、寛容な美を誇る。

いっぽう、利休によつて茶道具の形の定点が設定されて以降、陸続として茶の湯のための道具が我が国において作り出されてきた。が、利休がなした営為はあまりに完全であり、究極の引き算的に洗練された形が作り出されて、まるで取りつく島がない。もちろん現在利休形といわれているすべてが利休その人によつて創案されたものか検討の余地があるが、少なくともそういう形が生み出されたら自然とその名に帰してしまふほど、利休という名前は大きな説得力を茶の世界でもつてしまった。そんな利休のあとを襲った武将茶人古田織部は、利休の引き算の美意識とは真逆の過飾的かつ大胆なデフォルメを陶芸において施し、大いに新風を巻き起こしひとつの流行を作った。さらにその茶の弟子とされる江戸初期を代表する芸術家・本阿弥光悦は、手遊びとはいいながらも本業である刀剣の目利きで鍛えた審美眼を大いに発揮した工芸制作に積極的に係った。硯や調度品の蒔絵に意匠性の高い大胆なデザインを施し、さらに茶碗造りにおいては長次郎の流れを汲む樂家の当主の協力を得て、それまで茶の用のために窮まった姿を呈した茶碗に、大胆に作り手の想いを形にするという個性の発露をみせ、魅力的な茶碗を数々作り出した。「想いを形にする」という、近代的な芸術作品としての工芸品のあり方を、無意識的であれ陶芸によつて初めて一人称のかたちにしたのは、恐らくこの光悦がはじまりと考えられる。

であるから、近代以降、いみじくも作陶の素人でありながら近代陶芸の流れに大きくはなみをつけた川喜田半泥子を始め、荒川豊蔵、加藤唐九郎、北大路魯山人といった陶芸家たちは一様に光悦に対して特別の想いと敬意を抱き自己の芸術の発露としての魅力溢れる作品を数多く輩出した。そして、いまなお器好きの多くの人にとっての指標として光悦は存在している。

だが光悦以降、半泥子あたりまでの近世の陶芸の歴史の中で、こと茶の湯の茶碗において作家自身の芸術的な発露や個性をそのうちに認められる魅力ある作品が生み出されることはほとんど無かった。それは漆芸や金工等茶の湯道具のその他のジャンルにおいてもほぼ同様である。が、用に適った様式美を遵守した、あるいはそれに僅かな装飾を施した茶道具は陸続として生まれており、その時代の社会において茶の湯が求められていた役割がたちとなつた結果と受け止められる。

そして多様化する現代、茶の湯の造形も近代美術の洗礼を受けてまた大きく変化している。伝統的なニーズに則つた茶陶も日々多く生み出されているし、茶碗をひとつの彫刻

的な立体物にとらえ、まるで点てること飲むことまでも拒否するような挑戦的な茶碗も作られる等百花繚乱である。むしろ現代ほど、焼き物や工芸に係る人口が多く、バリエーション豊富な時代も過去になかったのではないかと思われる。が、そんな中で日常を離れ、主客が一碗を通じて心を通わせ、それぞれの想いを託するに足る茶碗がどれほど生まれているかという点、私自身の想いでは甚だ心もとないところである。が、茶の湯が今なお息づいて継続している文化である以上、古器を遊ぶのみならず今この時代を現し、百年後に問いかけるような茶の湯の具足を生み出すことは必然といえる。しかし、茶を点て飲むという行為自体に、四〇〇年前と今ではそれほど顕著な違いや変化はない。茶碗は両手で包んでお茶を頂くものだし、茶人は茶の粉を入れ茶碗の傍らに佇み、茶杓はお茶が掬えれば良い。その決まりきつた機能に応える器の姿がたちなど既に尽くした感がある。

むしろ改めて「見立て」にこそこれからの茶の活路があると私は考える。が、それは過去に行なわれた海外や古いものを拾い上げることではなく、今同じ時代を生きる工芸作家が自身の発露として作った器の中から、使い手が自由に自身の茶の湯に寄り添える器を選んでいくという新たな見立てだ。その結果こそ、未来に残す「今の茶」を作っていくことになると思っている。

茶の湯の器とはいつの時代にも、優れた作り手はもちろん、使い手があつてこそ初めて成り立つものなのだ。  
(武者小路千家十五代次期家元)

後記 茶の湯をテーマにした展覧会で、是非、試みたかった演出が、「茶室」と「見立て」である。「茶室」は、美術館の展示空間には存在しない異空間を、いとも簡単に出現させることができる。「見立て」は、そもそも使い手からの自由な発想が原点であり、展示に広がりをもたらしることができる。『現代の眼』では、出品にも協力していただいた仮設の茶室を制作した内田繁氏と、古典に限らず、近・現代のつくり手による茶の湯の器を広く観てきている千宗屋氏にそれぞれ文章をお願いした。内田氏からは、単なる茶の湯のためだけの空間ではなく、建築としての成り立ちとともに、まさに文化としての存在意義を語っていただいた。もう一本は、失礼ながら漠然と寄稿をお願いしてしまつたのであるが、武者小路千家の次期家元として数多くの茶の湯の空間に接してこられた千氏より、「見立て」にこそこれからの茶の活路がある」という力強い言葉をいただき、茶の湯の未来を見た思いがした。  
(工芸課長 唐澤昌宏)